

短 報

発達障害をもつ人への看護の実態に関する文献的考察

木戸久美子、林 隆

要旨

本邦では近年発達障害児者の理解が浸透しつつあるが、看護場面において「発達障害」を意識することが専門領域以外ではほとんどない。本研究は、本邦において発達障害児者を対象とした看護がどのように取り組まれているのかを文献から検討し、その実態を明らかにすることを目的とした。本邦においては、学習障害児者や発達障害児者を対象とした看護の実際に関する報告はあまりなく、特に医療機関を受診した際の看護に関する研究は少ないことが明らかになった。英国にはRegistered Nurse for the Learning Disabilitiesという看護師の登録制度があるがlearning disability nursingの歴史は浅いため看護実践の理論的根拠に関する報告は未だ少なく、教育の意義を強調することに重点が置かれていることが推察された。

キーワード：発達障害看護, Registered Nurse for the Learning Disabilities

1. 緒言

本邦では、平成14年2月から3月にかけて文部科学省が調査研究会に委嘱して実施した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果¹⁾によると、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は6.3%であることが明らかになり、ようやく発達障害児の存在が教育の現場に認知されるようになってきたが一般にはまだ十分認

知されているとは言い難い。

英国では、1946年に国民保健サービス法 (National Health Service Act) が制定され、1948年からNational Health Service (以下NHS) により全国民に保健医療サービスが提供されているが、抜本的な改革に迫れる状況に陥り1990年以降にNHSの改革が行われている²⁾。英国の看護職の教育もNHSの改革とともに変化し、2002年にThe Nursing and Midwifery Council (以下NMC) が創設され看護職

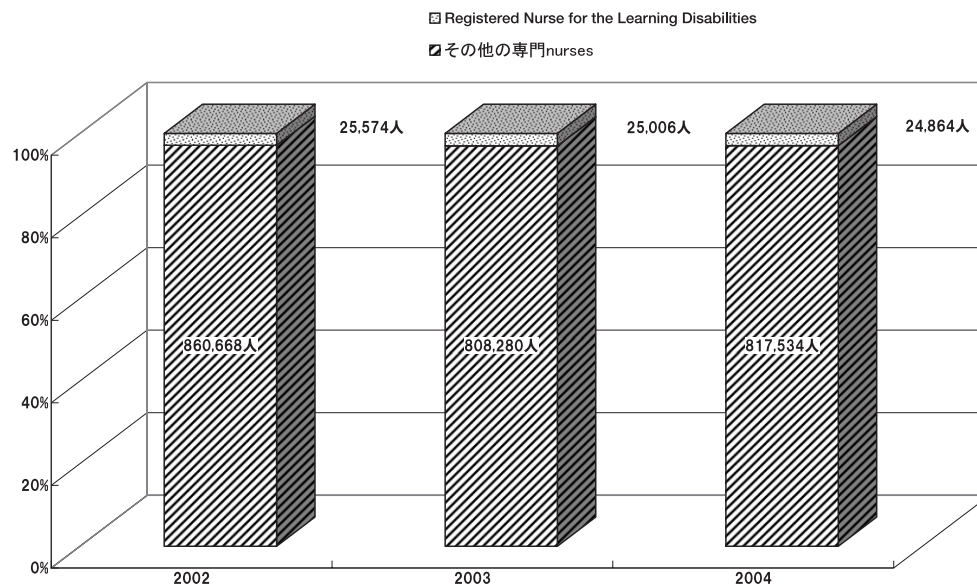


図1 英国におけるRN (LD) の数

の基礎教育から継続教育および資格登録までを行い、英国の看護職の養成はNurses, Midwives and Health Visitors Actに則り NMCが管理している³⁾。英国では学生の段階から特定の専門領域を選択でき専門教育を受けることができる。最初の一年間で学生全員が一般教養と基礎看護学を学びその後の2年間で選択した専門領域の看護を学ぶようになっており、専門領域にはAdult (成人), Child (小児), Mental Health (精神保健), Learning disability (学習障害)の4領域がある⁴⁾。看護免許登録においても専門領域の登録になっておりRegistered Nurse for the Learning Disabilities (学習障害看護師、以下RN (LD) と略す) という区分があり、そのRN (LD) の登録件数は、その他の専門看護師の登録件数と比較しても少ない (図1)³⁾。しかし、英国には学習障害をもつ者に対する健康維持・管理のために医療や健康教育を受ける場面において発達特性に応じた対応をする必要性があるという考えが根付いている。英国におけるRN (LD) の対象は学習障害だけでなく、発達障害、知的障害や基礎疾患を持ち発達が遅延していると思われる者も対象になっているようであるが、発達に問題を抱える者は高いヘルスニーズがあるという考え方が⁵⁾。本邦では、教育界で漸く発達障害が認知され、子どもの発達特性を踏まえた教育の必要性が叫ばれるようになったものの、発達障害児者が高いヘルスニーズを持っているという認識について取り上げたものは見あたらず、医療機関を受診する際の看護場面に対する取り組みや支援に関する報告が増えている現状はなく医療職全体に理解が深まっているかどうかは不明である。

本研究は、発達障害児者を対象とした看護の現状を文献的に検討し、本邦において発達障害児者への看護の実態を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

国内文献では、本邦の医学文献のデータベースである医学中央雑誌を用いて「発達障害」と「看護」をキーワードにして両方を含むものを検索し、1982年以前から2006年3月現在までを検索することにした。外国文献では、データベースとしてMEDLINEから1950年から1965年、1966年～2006年3月までを、またCINAHLは1982年～2006年3月までを「learning disability nursing」をキーワードにして検索し、検索された論文についてテーマや要約により分類し、内容を検討した。今回、MEDLINEで

表1 発達障害に関する文献 (国内)

障害受容に関すること	5件
親支援	23件
日常生活指導	6件
教育	2件
外国における看護の紹介に関するもの	2件
リスクの高い行為への介入	6件
発達障害の認知	1件
遊び	1件
他部門との連携	4件
医療場面におけるプレパレーション	2件
計	52件

の文献検索のキーワードにlearning disability nursingを用いたのは、英国において発達障害を含む看護としてRN (LD) の存在があることから、確実に発達障害を含む看護実践に関する文献を検索することができるのではないかと考えたからである。

3. 結果

医学中央雑誌では学会発表および論文報告が1984年から掲載されており全331件が検索された。そのうち発達障害看護に関連するものは52件であり、内訳は「障害受容に関すること」が5件、「親支援」が23件、「日常生活指導」が6件、「教育」が2件、「外国における看護の紹介に関するもの」が2件、「リスクの高い行為への介入」が6件、「発達障害の認知」が1件、「遊び」が1件、「他部門との連携」が4件、「医療的処置場面におけるプレパレーション」が2件だった (表1)。MEDLINEおよびCINAHLでは1992年から掲載されており全161件が検索された。内訳は「親支援に関するもの」1件、「障害特性の解説」が2件、「教育的支援」4件、「learning disability nursingに応用できる看護モデル」が8件、「看護実践」28件、「learning disability nursingの教育意義・役割」が70件、「当事者と親のニーズ」が4件、「スクリーニング」が12件、「learning disability nursingの歴史・変遷」が8件、その他24件で、そのほとんどは英国からの報告だった。

4. 考察

本邦においては、発達障害児者を対象とした看護の実際に関する報告は少ないことが明らかになり、発達障害という特性をふまえて看護を行うという意

識が一般の看護現場には存在しない可能性が推察された。英国の医療界でも、発達障害に対する理解があるものの、あらためて発達障害をもつ者には高い保健ニーズがあり、しばしばその障害特性のために適切な医療サービスを享受できない可能性があることを看護職が意識しなければならない⁵⁾との報告や発達障害をかかえる人が医療機関にかかる際に彼らのニーズに適切に対応するための適切なアプローチの開発の必要性⁶⁾が述べられているなど、未だ発達障害者への適切な医療体制が十分に機能しているとはいえない状況であることがうかがえる。英国の learning disability nursingの歴史は浅いために看護実践の理論的根拠に関する報告は未だ少なく、教育の意義を強調することに重点が置かれていることが推察された。

本邦における発達障害児者への看護についての国内文献のレビューからは、親支援に関するものが多く、発達障害児者に対して看護を直接行うことに関する報告は少なかった。発達障害のある児童と看護師の信頼関係の構築や日常生活行動自立に向けた援助の実践についての報告⁷⁾と広汎性発達障害をもつ患者で自傷行為を繰り返す対象への関わりへの報告⁸⁾がみられるが、具体的なエピソードの報告例でもあり、発達障害児者への看護実践として一般化し提示できるものではない。英国のRN (LD) らによって記述された著書⁹⁾の中で people with learning disabilityについて記述するにあたってその看護実践の典型例を掲載することは望ましくないと述べられている。その理由として、実践の領域が広すぎるということ、あまりに個別性が高いことが挙げられている。発達障害児をその診断名による特徴的をよりどころとしても実際の看護はできないということを物語っていると解釈できる。一方で本邦での発達障害児への看護実践として発達障害児の医療機関受診時の処置に関するプレパレーションの報告^{10) 11)}がある。発達障害をもつ子どもの受診時の看護の在り方について報告した貴重な例である。すべての子どもが適切な医療を享受するために必要な検査時の看護は、対象となる子ども全員が処置を受けることができるようにしなければならない。プレパレーションは、子ども達への病気や入院などによって引き起こされる心理的混乱に対処するために、正しい知識などをやさしく教え、それによって緊張や不安をやわらげ、子供たちが潜在的に持っている病気に

立ち向かう力を引き出す取り組みとして小児看護領域で行われていることである。特に広汎性発達障害児では事前の説明が重要であるとおもわれ、プレパレーションは必要不可欠な実践であるともいえる。しかし、障害分類はできても、すべての子どもに同様の対応で望ましい結果が得られるものではないため、事前の子どもの特性に関する情報収集をしておく必要もあり、その取り組みを一般化することは難しい。また、子どもの特性の情報収集という点について、家族との関わりは重要である。看護師の私見¹²⁾として発達障害児の関わりの中で家族とのインフォームドコンセントが重要であることも報告されており、家族への説明が発達障害児の親を安心させることにもつながり、さらに家族から必要な医療を行うために情報提供をお願いすることも親の安心感を高めることにつながるのではないかと考える。

発達障害特性は個々により様々であり、一つの障害特性だけでなく、スペクトラムという概念が用いられていることから、多様で複雑である。発達障害児者への看護は個別性が高く、発達特性の理解を踏まえる必要性が高いことから、初めて医療機関を受診した時に初めて接する看護師が上手く対応でき看護を提供できる可能性は低く、家族の支援なしには成り立たないともいえる。発達障害児者の親は、発達に関する専門外来を受診する以外の医療機関受診時に医療機関側にわが子の情報提供をどの程度行っているかについての調査はない。小児期であれば、歯科・口腔外科への受診率も高いことが想定されるが、受診行動に結びつけるためにどのような事前準備を親が行っているのかも文献はなく不明だ。発達障害理解に関する調査報告もないため一般的に医療職者全体の十分ではない可能性もある。看護職がどの程度、発達障害特性を理解して患者看護に携わっているのかも明らかにされていないことから発達障害に対する認知度は低いことが推察できる。院内入院患者への精神医学的対応を行った患児(者)の約半数に発達障害が存在すると推察されたとの報告¹³⁾があるが、医療機関に受診および入院した時に医療者は発達障害であることを最初から理解した上で関わるのではなく、何らかの問題が生じた後に初めて発達障害の可能性を医療職者が認知しているともいえる。今後、発達障害児者が医療機関を受診した際に適切な看護が実践できるように、医療機関側へ親がわが子の情報提供がしやすい環境作りを進

めることと同時に、看護職への発達障害特性理解を深める啓蒙も必要であると考え。本邦の看護基礎教育では看護過程の中で情報収集に必要な項目として発達特性をあげているが、その発達特性には年齢に応じた発達段階の特性が強調されているのみであり、発達障害特性に関する記述はみあたらない。看護基礎教育の中で、発達障害特性についても「障害」という概念枠組みの中で取り上げるのではなく、発達特性の一部であるという認識の中で教育がなされる必要があるのではないかと考える。

5. 結語

本邦においては、発達障害児者を対象とした看護の実際に関する報告はあまりなく、親支援に関するものが多く、医療機関を受診した際の看護に関する研究は少ないことが明らかになった。発達特性をふまえて看護を行うということが発達障害特性までを含むという意識が低い可能性が推察された。英国にはlearning disability nursingが専門領域として確立されているがその歴史は浅いために看護実践の理論的根拠に関する報告は未だ少なく、教育の意義を強調することに重点が置かれていることが推察された。また、発達障害をもつ者への取り組みについては個別性が高いことから一般化できる取り組み例を示すことが難しく個別の事例に対するエピソードを紹介しているにとどまっていることも明らかになった。本邦では発達障害を看護実践の場で意識することはあまりないが、今後、発達障害児者が医療機関を受診した際に適切な看護が実践できるように、医療機関側へ親がわが子の情報提供がしやすい環境をすすめるとともに、看護職への発達障害特性理解を深めることも重要で看護基礎教育課程で教育することも含めて検討する必要がある。

文献

- 1) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議今後の特別支援教育の在り方について(最終報告) 参考資料より http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301.htm
- 2) 近藤克則: 医療費抑制の時代を超えて - イギリスの医療・福祉改革, 週間医学会新聞, 2587, 2004
- 3) 曾根志穂, 高井純子, 大木秀一, 齊藤恵美子, 田村須賀子, 金川克子, 佐伯和子: イギリスにおける看護師の教育制度の変遷と看護職の現状, 石川看護雑誌, 3 (1), 95-102, 2005
- 4) 宮本千津子, 田中克子, 服部律子, 黒江ゆり子: 英国(UK)における看護教育について, 岐阜県立看護大学紀要, 2 (1), 109-115, 2003
- 5) Brown M: Emergency care for people with learning disabilities: what all nurses and midwives need to know, *Accid Emerg Nurs*, 13 (4), 224-231, 2005
- 6) Brittle R: Managing the needs of people who have a learning disability, *Nurs Times*, 100 (10), 28-29, 2004
- 7) 柿本洋子, 渡部真美, 崎原雅代, 望月宏美, 荒川志保, 半田聡, 佐藤眞理: 心因性嘔吐を繰り返した発達障害女児の看護 - 看護師と信頼関係作りと排便習慣の自立への援助, 日本児童青年精神医学会46回総会抄録集, 269, 2005
- 8) 室井千鶴子, 飯島かおり, 市川紫織: 広汎性発達障害のこだわりを持つ患者への看護 - 激しい自傷行為と暴力を繰り返すA君 -, 神奈川県立こども医療センター看護研究集録, 28, 1-5, 2004
- 9) John Turnbull: Discovering learning disability nursing, pp1-12, *learning disability nursing*, John Turnbull, 2004.
- 10) 中野さちこ, 大野尚美, 岩吹美紀, 矢田まり子, 岡本榮子, 佐藤泰一, 高橋脩: 発達障害児へのインフォームドコンセント 採決への取り組み, 日本看護学会論文集(小児看護), 35, 134-136, 2005
- 11) 川合由美, 坪見利香: 子どもが主体的に採血に臨むための工夫 - 発達障害児におけるプレパレーションを考える -, 日本看護学会論文集(小児看護), 34, 127-129, 2004
- 12) 村木英子: 発達障害がある子どもと家族のケア - 看護師の立場から -, 小児看護26 (12), 1659-1661, 2003
- 13) 星野崇啓, 山下淳: 院内入院患者のコンサルテーションリエゾンの実践, 埼玉小児医療センター医学誌, 20 (1), 72-77, 2003

Title: Discussion of Studies on Nursing for developmental disorders

Author: Kumiko Kido*, Takashi Hyashi*

*Faculty of Nursing and HumanNutrition, Yamaguchi Prefectural University

Key Words: nursing for people with developmental disorders, registered nurse for the learning disabilities
